

教 育 長 様

校番 11 福山誠之館 高等学校長**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る研究開発校  
平成30年度 報告書****研究の概要**

研究の目標（※計画書に記載したものを再掲）

「真正な評価」の設計と評定に関する研究を行い、教科の内容と資質・能力を結びつけて育成することで、生徒の資質・能力の伸長を図る。

研究内容（※対象，時期，方法を含む）

○総合的な学習の時間等における「探究的な学習」の充実について

## 1 「逆向き設計」の理論を生かした単元ベースの授業づくり

6月と11月に実施した誠之研究授業を中心として、パフォーマンス課題を設定した「単元シラバス」を教科で協議・作成をして授業を実施した。身に付けたい資質・能力を明確にして授業づくりを行うことで、探究に向けた基盤を育成するための授業改善をすることができた。

また、年間を通して各教科で作成し、CDM（教科主任会議）で共有した「単元シラバス」を、年間計画に配置したカリキュラムマップを作成し、身に付けさせたい資質・能力を可視化して、学習の際に生徒に意識させる予定である。

## 2 「総合的な学習の時間」における課題研究の改善

平成28年度から課題研究を行うにあたり、東京大学附属中等教育学校等で実施されている「ゼミ形式」の導入を一部の講座で始め、効果が見られたため、今年度は可能な講座で導入を行った。進捗状況の確認や研究の方向性を修正することができ、他の生徒と意見を交換することで、研究が深まるという効果が見られた。

「誠之ナビ（2年次）」「誠之ゼミ（3年次）」において、個人での課題研究を行っているが、平成31年度入学生から「総合的な探究の時間」の先行実施となるため、より探究を深めるためにカリキュラムの改善に取り組んでいる。来年度は探究に向けてスキルを身に付けるために、課題研究のスパイラルを複数回繰り返すことのできるカリキュラムとする予定である。

○資質・能力の評価について

## 1 「資質・能力」の明確化

「広く学び、深く考え、人を愛し、夢を立ち向かえる生徒」という目指す生徒像に向け、昨年度までの「年間指導計画」を作成する際に各教科で設定した資質・能力をもとに、CDMで協議を行い新たに学校全体として育成する資質・能力の見直しを行った。その後、資質・能力を意識してパフォーマンス課題を含む単元を設定し、カリキュラムマップの作成を行った。また、部活動やLHRなど、学校全体の学習活動を網羅したカリキュラムマップも作成した。

## 2 新しい評価方法の導入

研究開発においては、4段階の尺度が必要なこともあり、ルーブリックの作成については見直しが必要であった。今年度から単元シラバスに記述力のルーブリックを明記することとしたが、段階をどう見取るかが難しかった。『大学教員のためのルーブリック評価入門』をもとにルーブリックの作成方法の校内研修を行い、全体で共有したことで、各教科で単元シラバス等の作成が円滑に行われるようになった。

また、「産業社会と人間」及び国語科の授業で、協働性を見取るためのスパイダー討論を導入した。国語科の研究授業においても、スパイダー討論の手法を用いた授業を行い、協働性を高めるための授業のあり方について、協議を行った。

今年度の成果と次年度の課題（※仮説の検証を含む）

資質・能力を見直す中で、どのような生徒を育てたいかを改めて議論することができた。一方で、それを見取るルーブリックについては、評価する場面のイメージが難しく、レベルを明確にすることに課題が残った。実際に生徒の活動を見取っていく中で、全体のルーブリックを個別の活動のルーブリックとつなげ、生徒にもわかりやすいものとする必要がある。

また、今年度の12月に実施した、授業評価アンケートの結果によると、「産業社会と人間」「総合的な学習の時間」での学習が、学ぶ意欲や課題発見・解決への取組につながったとする生徒が、81.5%であった。この項目の評価は、探究コアスクール初年度の平成27年度の71.7%から平成29年度の77.9%へと伸びていたが、今年度は一段と高くなっている。しかし、1年次生で実施した資質・能力の評価結果を見ると、「学びに向かう力」の評価が二極化していることが見てとれる。「総合的な探究の時間」の実施に向けて、さらなるカリキュラム開発を進め、生徒の学びに向かう姿勢を育てていかななくてはならない。

来年度以降の研究開発は、より深い探究を生徒が自主的に行うためには、どのタイミングで誰が評価するか、組織的に課題研究に取り組むにはどのような仕組みとするべきか、さらには、評価を適切なものとするためにどのような工夫を行えばよいか、など取り組むべき課題は多く残されている。また、「総合的な探究の時間」の先行実施に向けて、探究を深めるために重要な役割を果たす「探究課題」の設定を見直す必要もある。生徒に、変化の激しい社会を生きていくために必要な資質・能力を身に付けさせるという視点を忘れずに、次年度もさらに研究を進めて参りたい。